拝復

お手紙の伴々うけたまはりいつぶ、四
[illegible]にばかり綴つて居る小生に賢明なる現
世の青年を然ふるとか矢立を指すといい
ふやうなものでは無く、且自
分も青年の中間入りをした訳ので年の上から
申しても甚だ言はれやうかと
をれがいやにな。
今、桜散る庭に面してしつかに聖書を
くり返しは、天の鳥を見よ、野の百合は
いかにしてそたつかを思へ、あはれむで

くり返しは、天の鳥を見よ、野の百合は

いかにしてそたつかを思へ、あはれむべ
きは我れ人にはこゝかな、自分は世に立た
ず人と交はらで草に老うるやようども、
わが肉は何ものよりも弱し、されどわが
心靈は詩によりて生く、おもふ自分は詩
にかくれぶりしならんには有り甲斐もな
き命なりけむと。されば世に自分とひと
しくつたなき人々には、藝術の苑に
さだめ
一つ一つに力有らしめて、
なほ入りも、剪紅裁綠をがき命を神にあ
つらへなば幸ならでなどと存じ侍。

学生生活も最皆小学校を卒へしばかり
にれる。

学生生活も最常小学校を卒ハしばかりの身には無意味の言葉にハ。沼の岸に草を敷いて美をひらき、夫そがれかゝる丘に佇み、うたたねするとうたひけるも紀ぎとろのみの思ひ出にハ、友たちとても無ければ、出て師に就けるにもあらず、奥蔵の二階に籠りてうす暗き窓の光をなつかしみたるも思へば十四五年のむかしにハ。その頃は桜はよく植えられぬ。

春ちかば

茨城の野にて

つゝへちば幸ちゝ

べき、と存じ

てらす暗き窓の光なつかしとも思へ

ばすでに四五年のむかしにか。その頃は桜は

よく植えられおりきき。

春ちかば　　茨城の野にて

東京　小石川区
白山御殿八
ひ富士軍軍